

安政七年（三月万延と改元）正月四條南側の大芝居で櫓下は竹本大隅太夫で太功記に大隅が嘉平次の内を語り山城掾は切狂言の「桂川連理柵」で帯屋の切を語りその後大切としてカケ合の阿古屋があつた。この歳還曆に達した彼は赤い袴に赤い見臺で坊主頭で床へ上るやうになつた。晩年山四郎となつてから

## 滑稽浄瑠璃ご

### 竹本山四郎

(二)

#### 高谷 伸

都道場）の芝居でも出してゐる。その時は中津太夫で櫓下は鶴澤友次郎が三味線紋下になつてゐた。それに先立つて元治元年三世長門太夫の歿した時は『朝嵐冥途の飛脚』といふ新作を大阪北の新地の芝居にの十月興行に出してゐる。追悼興行の代りに最近物故した藝人の追憶を地獄極楽の趣向でチャリ淨瑠璃

にすることはこの頃から流行して五世彌太夫も『圓平最後の口戀』や瑠寬、仁左衛門、雀右衛門、延三郎、猿藏の冥途斬などを作つてゐるが彌太夫のものでは『五代友厚、實川延若冥途斬』が二人の閻魔との對談を扱つたもので傑れてゐるが、その先蹤をなしたものが山四郎である。

は被布で出たこともあつた。帯屋は彼の得意藝の一つで慶應三年六月治嘉太夫（京

山城掾の作品の一つに『實川頼十郎冥途の乗込』といふのがある。二世頼十郎の死をあらわしてこんだもので慶應三年二月頼十郎が歿するとその翌月三月廿七月初日で彼の定打ちであるり櫓下であつた笠屋（谷）新太夫座で竹澤彌七の三味線で切を語り前は壽太夫と、圓六で一座は三光齋、濱太夫、津賀太夫らで、三味線の彌七はケレン師で阿古屋の三曲では三曲を用ゐず三味線で琴胡弓の音を出すといふやうなことも聞かせてゐる。その前後の語り物で得意とするものは妹背山の新酒屋、伊賀越の遠眼鏡、國姓爺の宿替などに、おかげ詣の流行に當つては『よいぢやないか踊斬』ちやりまわしの段といふやうなものも作つてゐる。

山城掾をさし止められて山四郎と改めた年月は當時の番附に月だけで年のないのが多いものではつきりないが石井葵水著『新京城變遷誌』にある如く明治十三年ではない。明治六年の大番附に山城掾事と肩書のある點から推測しても明治四五年の交ではないかと思

ふ。

明治七年頃の番附にはすつと山四郎で四月の南座には櫓下として出て八陣の毒酒を語り五月から六月へかけ大阪の道頓堀竹田の芝居から堀江の芝居へ櫓下は山四郎と人形の吉田金四の連名でしかも一座は古靱、呂、春子（後の大隅）、長尾などの太夫で三味線は友治郎、清六、叶、仙糸。人形は金四、喜十郎、東十郎、光造、辰五郎らで、同月の文樂の櫓下が春太夫、玉造の兩名で、越路、重太夫、廣助、玉造、辰造らに較べて堂々たる顔觸れであり、しかも山四郎は櫓下でも語り物は菅原の通しでは北嵯峨を語り二の切は長尾三の切は濱、四の切は織太夫に語らせてゐた。

明治期の彼は既に老年であつた。位置は櫓下でも語り場は若手に譲つてゐたのは得意藝がチャリ語りで切り語りでないことを自ら知つてゐるためでもあるが、その誇りを保持してゐたことは、どこまでも櫓下の位置を守つてゐたこと、官名不許可となつてから、もとの太夫名に戻らず山四郎といふ特殊の稱呼で語り手として立つてゐたことである。

大阪在住の時の住所は大寶寺中の町であつた。その後京都へ戻つて明治十一年では南座の「ひらかな」の辻法師が傑作だつたと傳へられる。

明治十四年三月、京都道場の宇治嘉太夫の

芝居に一世一代として太平樂の新關所を語りこの興行で鶴澤友次郎が五代目野澤喜八郎を襲いだ。(しかし間もなく友次郎に復讐)

ついで四月四條北の芝居で自作のチャリ淨瑠璃『名筆吃馬鹿平』舞のだんを語り、その年の秋、十月二十二日、一杯呑んでグウグウ野をかいて寝てゐるうちに、野が止まつたらそのまゝ死んでゐたといふチャリ淨瑠璃をそのまゝのやうな極樂往生であつたが、彼の死をチャリ淨瑠璃にした人のあつたとは聞かない。

享年八十二歳だつた。

義太夫語りとしては本流の文樂座にも據らず主として京都を本據としてゐたため傍流の人とはされてゐるが確かに異色のある存在だつた。門下に初代柳適太夫などがある。

彼の作品には以上の外に『玉手箱譽壽』龍宮の段(慶應二年)などもあるが特色のあるのは冥途淨瑠璃ともいふべき追憶のチャリ淨瑠璃であり、それを繼承したのは五世彌太夫であつたが、彌太夫以後さうした作品は殆んど跡が絶えてしまつた。

滑稽淨瑠璃といふよりは寧ろ諷刺淨瑠璃で、人間の死といふものを把へて笑はせやうといふのは逆説的戦法ではあるが、藝人の生活を通じ死の悲しみを前にしてその生前の華やかさを偲び涙を轉じて笑ひのうちに故人を

偲ぶことによつて親しみを増さうといふのが、この種の淨瑠璃の狙ひである。

それは滑稽淨瑠璃としても笑ひの藝術としても純粹のものではないし、吃の馬鹿平の如きはモジリの作品で駄洒落の範圍を出ないが涙ばかりの藝道のやうに思はれてゐる義太夫節の中にかういふ笑ひを狙つた人のあつたこと、これをうまく開拓すれば義太夫に新展開も示されやうものを、時代と指導者の缺如は道樂的な趣向に終つてしまつたのは惜しいことと思ふ。

それを考へてもこの種の滑稽淨瑠璃の發生は時代の深い要求によるものではなく、却つて時代への自嘲的態度から出たものではあるまいか。

かく考へる時現代に生れる笑ひの藝術もまた單なる自嘲的な漫畫的世相觀から看過されるものより生れないのではないかと思ふ。それはくすぐりによる満足に終り易い、笑ひの純粹性への省察がないからである。現代生活の逼迫の半面には皮肉な題材はすくないどころか多すぎるばかりである。その冷僻な批判を藝術の上に轉換する時、却つてすばらしい哄笑と皮肉な微笑とが生れるのではないか。最初に木谷氏の説として引用した明治時代の社會不安が滑稽淨瑠璃を要求したかも知れないといふ言葉は、明治時代への考察で

はなく、それに數層倍する現代の深刻な社會事相と考へ合せて、現代の社會不安時代こそ却つて滑稽淨瑠璃的なものを批判性に富んだ藝術眼によつて再檢討されるべきであると希望條件として生きてくるのではないかと思ふ。

すくなくとも私は木谷氏の説を轉用して敢て淨瑠璃に限らず現代藝術の途として一つの示唆したいと思ふものである。その點山四郎の略傳はその道の一人として例證ともなるとの意味も含んで提供したのみだと考へて貰つてもよいのである。(終)

### 洋樂演劇事始

道著)キリシタン傳來に伴ふ洋樂の傳來と國劇への關聯、影響を詳述した特殊な研究である。(東京都杉並區上荻窪二ノ八太洋出版株式會社、二十二圓)

日本の演劇(山本修二著)現代日本の演劇、日本演劇學の構想は十數篇の研究と卷末に「時評と劇評」を添へてある。最近の劇壇的現實をそのまゝ生きた素材として平易に日本演劇の持つ本質を興味深く究明した好著、特に學生演劇に對する懇切を極めた批判に多くの示唆を持つてゐる。(大阪市東區谷町五ノ九堀書店、三十五圓)